

〈原 著〉

中学生運動部員における反応的攻撃性と 身体状況認識および認知的共感性との関連

川田裕次郎*・田中 純夫**・杉浦 幸***
山田 泰行***・今野 亮*・中島 宣行*

The relation of reactive aggression with consciousness of body condition
and cognitive empathy in junior high school students in athletic clubs

Yujiro KAWATA*, Sumio TANAKA**, Miyuki SUGIURA***,
Yasuyuki YAMADA***, Ryo KONNO* and Nobuyuki NAKAJIMA*

Abstract

The purpose of the present study was to examine the relation of reactive aggression with consciousness of body condition, cognitive empathy (perspective taking), a reach of awareness and human conflict. This study was carried out to give us more accurate and useful knowledge and view points for educational intervention to the school scene.

The survey was conducted on 673 junior high school students (354 boys, 319 girls) in 3 public junior high schools located in a residential area in a metropolitan region. The questionnaire consisted of a reactive aggression scale, a consciousness of body condition scale, cognitive empathy (perspective taking) scale, a reach of awareness scale, human conflict scale and a question which asked whether or not students belonged to athletic clubs.

The main results were as follows:

- Students who belonged to athletic clubs got high points on a consciousness of body condition scale compared with students who didn't belong to athletic clubs.
- A reach of awareness was not related to reactive aggression.
- In the group of male athletes, it was possible that cognitive empathy (perspective taking) restrained reactive aggression and reactive aggression caused human conflict.
- In the group of female athletes, it was possible that cognitive empathy (perspective taking) respected to dialogue and consciousness of body condition inhibited reactive aggression.

Furthermore, in both athletic male and female groups, reactive aggression was an enhancing factor to human conflict. Therefore, it would be necessary for male and female students in the athletic clubs to cultivate their cognitive empathy (perspective taking) in order to prevent them from problem behavior such as human conflict resulted from reactive aggression.

Key words: reactive aggression, consciousness of body condition, cognitive empathy, a reach of awareness, human conflict

* 体育心理学研究室
Seminar of Psychology of Physical Education

** 教育心理学研究室
Seminar of Educational Psychology

*** 精神保健学研究室
Seminar of Mental Health

1. 問題と目的

現代の学校現場における児童・生徒の問題行動に関しては、いわゆる普通の子どもが“キレル”といった衝動的攻撃行動を伴った突発的な暴力の増加が指摘されており、近年、数多くの研究がなされ、その成果が蓄積されてきている。こうした状況は非行少年と一般少年とのボーダーレス化と表裏一体をなし、環境やパーソナリティに特別な負因を持たない青少年における社会化不全の状態を浮き彫りにしている。思春期の不適応行動や非行を考える上ではそのような行動そのものを、一般的な状況から逸脱した特異なものとするのではなく、日常の行動の延長線上に存在するものと捉え、特に暴力を伴った問題行動を引き起こす主要なスペクトルとしての攻撃性をさまざまな側面から把握していくことが不可欠になっている。そのために、そうした攻撃性を正確に捉える指標を作成すること、さらに、攻撃行動の発生機序を明らかにしていくことは、学校教育における生徒指導現場で非行等の問題行動に対応していく場合だけでなく、その後のメンタルヘルス等の健康問題を考えていくうえでも重要になっている。

攻撃性を把握する最近の研究では、Dodgeら(1991)³⁾の研究を基礎にして、濱口ら(2004⁵⁾、2005a⁶⁾)によって作成された“反応的攻撃性尺度(reactive aggression)”はささいな刺激に誘発されて“キレル”行動を頻発させる子どもたちの状況を説明するうえで、感情、動機づけ、認知といった内的特性に焦点を当てていることから有用とされている。さらに濱口(2005b)⁷⁾の研究からは、児童において反応的攻撃性が高い子どもは、その後の思春期以降に抑うつ症状が現れるケースが多いことを指摘しており、児童期の問題行動だけでなく思春期における不登校や無気力といった問題等の臨床的な介入策を考える際にも重要な視点を提供している。

攻撃性研究について、松岡(2000)⁸⁾は、Berkowitz(1989)¹⁾の示した攻撃認知過程における攻撃の2段階評価について再検討しており、第1段階の「嫌悪感情の評価」と第2段階の「攻撃反応

の適切さや機能性の評価」は、それぞれ攻撃性の「入力過程」と攻撃性の「出力過程」を説明する構造になっている点を指摘している。本研究の攻撃性尺度の基礎になっているDodgeの考え方は、攻撃性の入力過程に分類される研究である。つまり、キレル行動の誘発要因あるいは抑制要因を探るためには、Dodgeの視点である「攻撃に先立って事態や相手の意図をどのように認知するか」という要因が重要になってくる。攻撃的な者が、他者に悪意を知覚しやすいという傾向は、成人の被験者を対象に行った大淵(1982)¹¹⁾の認知実験でも確かめられている。したがって、ここで扱う反応的攻撃性については、関連要因として被験者の認知的な側面に焦点を当てていく必要があると考えられる。

本研究では、中学生を対象として、先にも触れたように認知的な側面が攻撃性の抑制にどのような機能を果たしうるのであるかを検討するために、先行研究で有効性の示された他者の視点取得等を問う認知的共感性(perspective taking)と日常的な人間関係や普遍的な物事についてどの程度広く認識しているかを問う認識の幅広さを取り上げた。さらに、本研究では運動やスポーツを行っている状況と攻撃性の関係を捉えて、教育現場での有効な介入方法について検討するために自己の身体状況に対する認識と運動部への参加状況をとりあげた。これらの分析を通して、今後、児童生徒の対人攻撃行動に対して、身体運動を活用したストレスマネジメント等の教育的介入の視座を見いだすことが最終的なねらいである。

2. 方法

2.1 対象と調査時期

2.1.1 調査対象

首都圏にあるA県B市の公立中学校3校に所属する中学生を対象として調査を行った。いずれの学校も商業地域からそれほど離れていない住宅地を中心とする学校環境である。調査対象者のうち、得られた回答は673名(男子354名、女子319名)であった。

2.1.2 調査時期：平成18年2月～4月に実施

した。

2.2 調査内容と質問紙の構成

質問紙法調査によって実施し、ホームルームの時間を用いて、質問用紙は担任教師によって生徒に配布され、その場において無記名で回答を求め、終了後すぐに回収された。回答の際には質問用紙の回答結果が本研究以外の目的で使用されることはなく、回答者のプライバシーは厳重に守られることを説明した。得られた回答はSPSS for windows 14.0Jを用いて分析を行った。質問項目の種類と構成は以下の通りである。

2.2.1 反応的攻撃性尺度

濱口 (2004)⁵⁾の作成した反応的攻撃性尺度12項目を一部改変して7項目で構成した。反応的攻撃性が高くなるほど得点が高くなるように、各項目で「全くあてはまらない」から「非常によくあてはまる」までの5段階評定で回答を求め、1点～5点と得点化した。中学生を対象とした濱口 (2004⁵⁾, 2005a⁶⁾の研究では、2因子構造が明らかにされており、「報復意図」および「怒り」と命名されている(具体的な項目は表1を参照)。

2.2.2 身体状況認識尺度

今野 (1991)¹⁰⁾が作成した自己概念や自己意識に関する質問紙を用いて江川 (1999)⁴⁾が「身体と心の安定感と充実感」として抽出した項目を基に、身体症状状を明確に捉えるために身体に関わる項目だけを選出して表現を改変し、さらに項目を追加して6項目で構成した。自己の身体についての良好なイメージを問うものであり、これらの問いに対して否定的に回答する状態が、無気力と関連していると考えられる。ここで用いる項目は田中ら (1995)¹²⁾の用いた無気力尺度における「生活のリズム・疲労」の項目とも共通性があり、この因子は、無気力を生徒が認知する感情的側面の無気力感だけでなく、現実の生活場面に現れるさまざまな意欲減退といった状態や身体症状にも焦点を当てたもので、実生活での適応を考えるうえで有効であると考えられる。具体的な項目は、以下のとおりである。

①「からだが軽い感じがする」②「からだ自由に動く感じがする」③「からだだるくて動き

たくない感じがする (R)」④「からだに楽に動く気がする」⑤「からだがつろいでいる感じがする」⑥「からだを動かすことがめんどくさい (R)」(Rは逆転項目)の6項目について、「最近一週間、どのくらい次の項目が表す感じを経験しましたか」と問い、身体状況認識が高くなるほど得点が高くなるように各項目について、「全くなかった」から「非常に多くあった」までの5段階評定で回答を求め、1点～5点と得点化した。

2.2.3 認知的共感性尺度

対象を他者の視点から見たときに、どのように見えるかを理解できるようになることを他者の視点取得 (perspective taking) という。これは他者の認知や感情を理解するという意味も包含し、他者への共感性の認知的側面を示す概念といえる。

本研究ではDavis (1983)²⁾の作成した認知的共感性尺度を、丸山・清水 (1990)¹⁰⁾が翻訳した7項目を使用した。丸山らの先行研究では1因子構造が示されたが、田中ら (2005)¹³⁾の研究では、2因子構造であり、「他者視点取得」と「対話重視」の下位尺度が抽出されている。各項目について「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの5段階評定で、1点～5点と得点化した。なお、「2. 他の人から何かいやなことをされた時に、自分も同じようなことをするかもしれないと考えるのはむずかしい」、「4. 同じ状況で他の人がなぜ自分と違うことをしたのか、その理由を考えるのはむずかしい」、「5. 自分と違う意見を持っている人の考えは、なかなか理解できない」、「6. 自分が正しいと思える時には、わざわざ他人の意見を聞く必要はない」の「他者の視点取得」に該当する項目は逆転項目である。

2.2.4 認識の幅広さ

麦島 (1983)⁹⁾が非行少年の認識を研究する際に、根元的問題への関心の程度を測る項目を1部改変して「宇宙の果てはどうなっているか」、「未来の地球はどうなっているか」、「死後の世界はどうなっているか」、「神様はいるか」、「大人になったときの自分」、「世の中は平等にできているか」、「両親や家族との関係について」、「異性のことについて」の8項目で構成した。麦島は学校で教材

として直接の材料となっていない課題のについての認識の領域が広い者ほど非行率が低いことを明らかにしている。さらに麦島によれば知的に高い者が非行をしにくいということではなく、知的関心の高い者の方が非行化しにくい傾向を示している、いわゆる知的能力の高低と非行化傾向とは大量的なデータにおいては関係することもあるが、基本的にはその両者間に因果関係は存在しないとしている。

これまでの研究では、非行と認識の幅広さとの関連性は示されているものの、その前駆的要因のひとつである攻撃性との関連性についての研究は見られない。そのため、認識の幅広さというさまざまな領域のことがらに興味を抱き、既存の知識ではあきたらず未知の課題を解決しようとする態度が、突発的な暴力と関連性の強い反応的攻撃性に抑制的に機能するのかどうか検討していく。各項目について「全く考えなかった」から「よく考えた」までの4段階評定で、1点～4点と得点化した。

2.2.5 対人的トラブル

学校生活において最近起こった出来事の頻度を問うものであり、本研究では、「友人とけんかをした」と「学校で意見が対立する」の2つを取り上げ、経験や行動的側面の指標として扱った。各項目について「全くない」から「よくある」まで

の4段階評定で、1点～4点と得点化した。

2.2.6 参加している部活動の種類

所属している部の名称を問い、運動部と非運動部に分類した。

3. 結果および考察

3.1 関連要因の指標

3.1.1 反応的攻撃性の構造

表1のように、反応的攻撃尺度への回答を因子分析した結果（主因子法・プロマックス回転、因子平方和57.78%）では、濱口ら（2004⁵⁾、2005a⁶⁾）の先行研究どおり、2因子構造が抽出され、「怒り ($\alpha=.80$)」、「報復意図 ($\alpha=.83$)」の2つを指標として使用することとする。この2指標間の相関係数（Pearson）は、男子で.648、女子で.590であった。

3.1.2 認知的共感性の構造

表2のように、反応的攻撃尺度への回答を因子分析した結果、（主因子法・プロマックス回転）では、田中ら（2005¹³⁾）の先行研究と同様、「対話重視 ($\alpha=.57$)」と「他者の視点取得 ($\alpha=.58$)」の2因子が抽出され（因子平方和34.81%）、それぞれを認知的共感性の下位尺度として後の分析を行なった。

表1 反応的攻撃性の因子分析結果

因子名	No.	項目内容	因子負荷量		共通性
			F1	F2	
怒り ($\alpha=.80$)	15	いったん腹を立てると、なかなか収まらない	0.82	0.01	0.68
	22	腹が立つときは、おさえられないほど怒りがこみ上げる	0.70	0.09	0.58
	25	ちょっとしたことでカッとなりやすい	0.66	-0.01	0.42
	6	頭にきたことは、いつまでも忘れない	0.60	0.02	0.37
報復意図 ($\alpha=.83$)	5	やられたら、やり返さないと気がすまない	-0.09	0.87	0.65
	21	何かされたら、仕返しをしないと気がすまない	0.08	0.86	0.84
	14	仕返しをするときは、徹底的（てっていき）にやる	0.22	0.53	0.50
		寄与率 (%)	50.99	6.80	
		累積寄与率 (%)	50.99	57.78	
		因子間相関	F1	0.72	

表2 認知的共感性の因子分析結果

因子名	No.	項目内容	因子負荷量		共通性
			F1	F2	
対話重視 ($\alpha = .57$)	3	何かを決めるときには、自分と違う意見も聞こうとする	0.83	-0.05	0.67
	1	何かを決めるときには賛成の人と反対の人の意見のどちらにも注目するようにしている	0.63	0.04	0.42
	7	友人と何かをする時には、その友人の考えることを予想しながら行動している	0.30	-0.14	0.08
他者の視点取得 ($\alpha = .58$)	5	自分とは違う意見をもっている人の考えは、なかなか理解できない	0.07	0.72	0.56
	4	同じ状況で他の人がなぜ自分と違うことをしたのか、その理由を考えるのはむずかしい	-0.14	0.54	0.26
	6	自分が正しいと思える時には、わざわざ他人の意見を聞く必要はない	0.20	0.45	0.31
	2	他の人から何かいやなことをされた時に、自分も同じようなことをするかもしれないと考えるのはむずかしい	-0.25	0.39	0.15
寄与率 (%)			22.54	12.26	
累積寄与率 (%)			22.54	34.81	
因子間相関			F1	0.36	

表3 認識の幅広さの因子分析結果

因子名	No.	項目内容	因子負荷量		共通性
			F1	F2	
根源的認識 ($\alpha = .78$)	2	未来の地球はどうなっているか	0.79	-0.01	0.61
	1	宇宙の果てはどうなっているか	0.75	-0.10	0.49
	3	死後の世界はどうなっているか	0.70	-0.03	0.47
	4	神様はいるか	0.40	0.27	0.36
	6	世の中は平等にできているか	0.35	0.29	0.32
	日常的認識 ($\alpha = .61$)	7	両親や家族との関係について	-0.05	0.68
8		異性のことについて	-0.02	0.57	0.31
5		大人になったときの自分	-0.01	0.54	0.28
寄与率 (%)			32.55	8.35	
累積寄与率 (%)			32.55	40.90	
因子間相関			F1	0.54	

3.1.3 身体状況認識の因子構造

身体状況認識は1因子構造(主因子法・プロマックス回転, 因子平方和38.74%)であり, 内的一貫性($\alpha = .72$)も比較的高くなっている結果から, 6項目の合計得点をその指標とする.

3.1.4 認識の幅広さの因子構造

認識の幅広さについては, 因子分析(主因子法・プロマックス回転)によって, 「未来の地球はどうなっているか」「世の中は平等にできているか」といった「根源的問題($\alpha = .78$)」と「家族や両親との関係」「異性との関係」等の「日常

表4 運動部・非運動部別の反応的攻撃性および身体状況認識の得点比較

	運動部		非運動部		主効果		交互作用
	男子 N=307	女子 N=204	男子 N=36	女子 N=109	部	性	
怒り	10.81(4.08)	11.37(4.31)	13.28(4.50)	11.24(4.16)	6.88**	2.74	8.60**
報復意図	8.89(3.51)	8.66(3.54)	10.39(3.31)	8.29(3.66)	2.26	9.60**	6.17*
身体状況認識	18.39(4.72)	17.97(4.39)	17.32(4.33)	16.60(4.49)	6.39*	1.43	0.09

* p<.05 **p<.01

表5 運動部・非運動部別の反応的攻撃性と認知的側面との相関係数

		身体状況認識	他者視点取得	対話重視	根源的認識	日常的認識
男子	運動部	-0.10	-0.31***	0.04	0.05	0.02
	非運動部	0.04	-0.66***	0.09	0.03	0.07
女子	運動部	-0.33***	-0.30***	-0.21***	0.10	0.07
	非運動部	-0.35***	-0.36***	-0.10	0.00	-0.09
男子	運動部	-0.08	-0.25***	-0.02	0.04	0.08
	非運動部	0.14	-0.58***	0.03	0.11	-0.01
女子	運動部	-0.11	-0.28***	-0.14*	0.03	0.02
	非運動部	-0.27***	-0.43***	-0.19*	-0.09	-0.09

* <.05 *** <.001

的認識 ($\alpha=.61$)」の2因子を抽出した。

3.2 運動部・非運動部別にみた反応的攻撃性と身体状況認識の得点比較

恒常的にスポーツを続けている運動部に所属している生徒の特性を明らかにするために、運動部所属生徒とそれ以外の非運動部所属生徒との2群にわけて、反応的攻撃性と身体状況認識の得点について分散分析を行なった。

表4のように、反応的攻撃性のうち「怒り」では、運動部か否かに主効果があり、部×性に交互作用もみられた。反応的攻撃性のもう一方の「報復意図」では、逆に性差に主効果があり、部×性に交互作用がみられた。「身体状況認識」では、運動部か否かだけに主効果を示す結果となった。これらの結果から他者からの行為に対する怒りの処理は、普段から運動部で活動しているものの方がうまく行えていることが推察される。長年運動部に関わってきた経験から考えられる原因のひとつとして、運動部に所属している者は運動部という比較的規則が厳しく上意下達の間関係の中に

身を置くことで、多くの葛藤を経験し怒りへの対処方法を身につけているのではないかと考えられる。そのために、運動部で複雑な人間関係に身を置きながらも目標を共にする仲間と多くの時間を過ごすということは、反応的攻撃性を抑制し社会化を促進する効果を持ちうるのかもしれない。しかしながら、本研究では横断的な研究であり、その原因を突き止めるには至っていないため、さらなる検討が必要である。報復意図は、運動部か否かによる差はみられず、女子が男子よりも低い結果となっている。この結果は濱口(2004)⁵⁾の指摘を裏付ける結果となった。

ここでの結果において注目すべきは、予想されたように運動部に所属している生徒の方が、明らかに自己の身体について良好な状態であると認識している点である。

3.3 反応的攻撃性と身体状況認識・認知的共感性・認識の幅広さとの関連

2つの反応的攻撃性と身体状況認識・認知的共感性・認識の幅広さとの間のピアソンの相関係数

を表5に示した。「身体状況認識」は、女子では「怒り」や「報復意図」という反応的攻撃性と負相関を示しているが、男子では有意な相関は見られなかった。

認知的共感性の下位尺度である「他者視点取得」は、男女ともに運動部・非運動部ともに、「怒り」「報復意図」と負相関が示され、反応的攻撃性を抑制する効果があると考えられる。「対話重視」は女子において反応的攻撃性を抑制する運動部・非運動部ともに、「怒り」「報復意図」と負相関が示され反応的攻撃行動を抑制する可能性が示唆された。男女ともに非運動部の方で、より強い抑制効果を示す結果となり、とりわけ男子では顕著であった。

認識の幅広さでは「根源的認識」と「日常的認識」ともに反応的攻撃性との有意な相関はここでは示されなかった。

3.4 運動部員の反応的攻撃性・対人的トラブルに関連する認識要因

運動部員においては、非運動部よりも男女ともに身体状況認識が良好であり、男子においては反応的攻撃性が低く、女子においては反応的攻撃性

が高かったため、ここでは運動部員内での男女の比較を行うために認知的側面と対人的トラブルの関係を説明できるモデルを導く試みを Amos for windows 6.0を用いて行った。認知的側面の指標を独立変数として、2つの反応的攻撃性と2つの対人的トラブルにどの程度寄与するかを検討するために共分散構造分析を行った。モデルの適合度は、図1では、GFI=.971, AGFI=.918, CFI=.929, RMSEA=.076, 図2では、GFI=.976, AGFI=.933, CFI=.973, RMSEA=.046であり、比較的高いものであった。図1に示したように、男子運動部員では、「他者視点取得」が最も反応的攻撃性を抑制させる要因になっている。さらに反応的攻撃性の高さは、対人的トラブルを引き起こす要因になっていることが読み取れる。女子運動部員では、「他者視点取得」だけでなく「対話重視」も反応的攻撃性の抑制に関連しており、さらに身体状況認識の良好なものが、最も反応的攻撃性を抑制させることを示す結果となった。身体の良い状態とその自覚が、反応的攻撃性を抑制させること、さらには、男子よりも女子において反応的攻撃性が対人トラブルに強く結びついてい

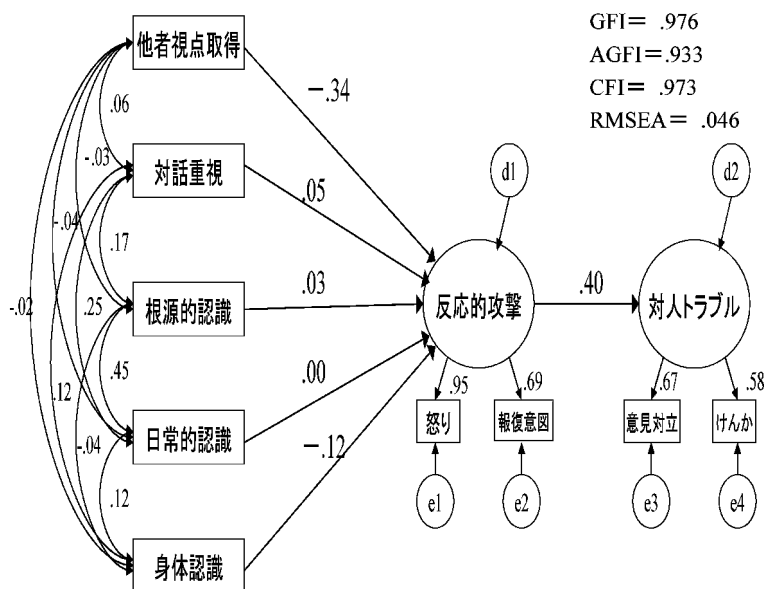


図1 男子運動部員における認知的側面と攻撃性

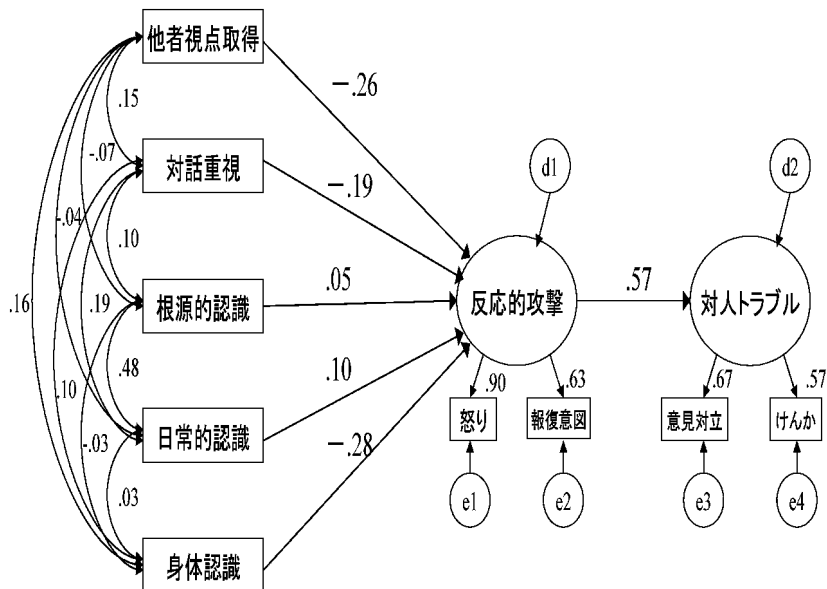


図2 女子運動部員における認知的側面と攻撃

る状況が見て取れる。

4. 結 論

4.1 認知的共感性・身体状況認知・認識の幅広さと反応的攻撃行動及び対人トラブルとの関係

男子運動部員では、「他者視点取得」が反応的攻撃性を抑制し、さらに反応的攻撃性の高さは、対人的トラブルを引き起こす可能性が高いことが示された。一方、女子運動部員では、「他者視点取得」だけでなく「対話重視」も反応的攻撃性を抑制する可能性が高いことが示された。さらに女子では「身体状況認識」の良好なものの方が、最も反応的攻撃性を抑制する可能性が高いことが示唆された。反応的攻撃性と対人トラブルは中程度の正相関があり、男子よりも女子においてより強く関連していた。認識の広さと反応的攻撃性の関連は示されなかった。したがって、男子運動部員、女子部員ともに反応的攻撃性の抑制と対人トラブルといった問題行動の防止のために学校教育において認知的共感性 (perspective taking) を育む必要があると考えられる。

4.2 今後の課題

今回は中学生の反応的攻撃性に絞って分析を試みた。反応的攻撃性に関連する認知的側面として認知的共感性と身体状況認知を取り上げて研究を行ってきたが、反応的攻撃性を変動させる認知的要因をさらに精緻に探求していくためには、認知の歪みを捉える尺度 (パラノイド尺度等) を導入する必要もあると考えられる。さらに、本研究では運動部員の方が非運動部員よりも反応的攻撃性が低いという結果が示されたが、その理由を明確にするまでには至っていない。運動部に所属することによってもたらされる生活状況がどのようなプロセスを経て反応的攻撃性の抑制に寄与しているのか、さらには、反応的攻撃性のパーソナリティ要因に最も関連すると考えられる家庭環境等との検討も必要になると考えられる。また、十分な対象者を確保したうえで非運動部員内の認知的側面と対人的トラブルの関係を説明できるモデルを導き、恒常的に運動やスポーツを行っている者とそうでない者との比較を行って、体育や部活動等の教育上の施策との関係から検討することも必要であると考えられる。

(本研究は、平成16～18日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 C(2)課題番号16530458 (研究代表者田中純夫) の助成を受けて実施した調査の一部を使用している)

引用文献

- 1) Berkowitz, L. (1989) The Frustration aggression hypothesis: An examination and reformulation. *Psychological Bulletin* 106, 59-73
- 2) Davis, M. H. (1983) Measuring individual differences in empathy: Evidence for a Multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology* 44, 113-126
- 3) Dodge, K. A. (1991) The structure and function of reactive and proactive aggression. In: D. J. Pepler & K. H. Rubin (Eds.) *The development and treatment of childhood aggression*. Hillsdale, N. J: Lawrence Erlbaum. 201-218
- 4) 江川佳代子 (1999) 「アレクサンダー・テクニーク」の心理的考察—自己概念・自己意識に及ぼす影響— *応用社会学研究* 9, 69-85
- 5) 濱口佳和 (2004) 反応的攻撃性 (reactive aggression) 尺度 (中学生版) の作成—反応的・道具的攻撃性尺度 (RIS 中学生版) の改訂(2)—. *日本教育心理学会第46回総会発表論文集*, 493
- 6) 濱口佳和, 三重野祥子, 石川満佐育 (2005a) 中学生の能動的攻撃性・反応的攻撃性と心理・社会適応との関連(2) —抑うつ傾向および非行行動欲求との関連—. *日本教育心理学会47回総会発表論文集*, 135
- 7) 濱口佳和, 森丈 弓, 三浦秀徳 (2005b) 青年の能動的・反応的攻撃性に関する研究(1). *犯罪心理学研究* 43, 146-147
- 8) 松岡良治 (2000) 対人攻撃行動における二要因モデルの検討—攻撃性精神病理に関する心理的考察—. *応用社会学研究* 10, 83-99
- 9) 麦島文夫 (1989) *非行化過程の追跡研究 1975～1988 少年非行*. 西村晴夫編, 東京, ソフトサイエンス社, 87-98
- 10) 今野義孝 (1991) 筋緊張の自己弛緩による自己像の変容過程の特徴(2). *文教大学教育学部紀要* 4, 75-81
- 11) 大淵憲一 (1982) 欲求不満に対する原因帰属と攻撃反応. *実験社会心理学研究* 21, 175-179
- 12) 田中純夫, 安香 宏, 田中奈緒子 (1995) 非行少年における無気力の構造とその関連要因. *千葉大学教育学部教育相談研究センター年報* 12, 33-52
- 13) 田中純夫, 水野基樹, 山田泰行ら (2005) 生徒の対人攻撃場面における認知とコーピングスタイル. *日本教育心理学会第47回総会発表論文集*, 118

(平成18年10月16日 受付)
(平成19年1月19日 受理)